

老年看護学実習の教育評価にルーブリック評価表を導入して

古城 幸子*・木下 香織

新見公立大学看護学部

(2013年11月13日受理)

老年看護学実習の実習評価は、学びの質に焦点を当てて形成的評価を行う評価方法のルーブリック評価を取り入れた。まだ1年間の試行段階であるが、今回のルーブリック評価の導入において、老年看護学実習の目的・目標を達成するために効果的な活用ができることが示唆された。高齢者の老化の過程や生活者の理解について達成度が高く、実習プロセスの中で繰り返し目標への振り返りが可能となった。一方で、医療依存度の高い高齢者の理解や社会資源・サポートシステムへの理解が不十分であることが明らかとなり、ルーブリックのレベルを設定する際の目標の表現など修正点や課題が明らかになった。
(キーワード) 老年看護学実習, 実習評価, ルーブリック評価指標

はじめに

教育評価には診断的評価 (diagnostic evaluation)、形成的評価 (formative evaluation)、総括的評価 (summative evaluation) の3つの基本形態がある¹⁾。一般的に講義科目では科目終了時、対象学生に対して同時期一斉に筆記試験や課題レポートなどによる事後評価を行うもので、総括的評価を用いることが多い。しかし、看護学実習の場合、総括的評価のみでは、実習体験のプロセスの中での学生個々の学びの質の変化を評価できない。そのため、形成的評価が重要である。

ルーブリック (rubric) は、2002年ごろから絶対評価の手立てとして、学びの質を評価する方法として注目されている²⁾。欧米においてはすでに得点化できる評価指標としてルーブリックが活用されているが、日本の教育文化との相違によって活用方法に注意が必要との指摘もある³⁾。現在、医療分野の基礎教育に導入した報告も散見する^{4, 5)}ものの、看護基礎教育においてルーブリックの導入は多くない⁶⁾。

2010年の看護学部開設から2013年の完成年度を迎え、2012年度後期より1期生の老年看護学実習を開始した。学部の実習においては、学びの質に焦点を当てて形成的評価を行うことを目的に評価方法を検討し、ルーブリック評価を取り入れることとした。現在、1期生の老年看護学実習を修了し、その試行による教育効果を分析段階である。

本研究では、1年という短期間の老年看護学実習への試行段階であるルーブリック評価導入の成果を明らかにすることを目的とした。今回ルーブリック評価を導入した

結果、教育評価の2つの側面、①学生の学習成果の評価と②教員の教授活動の評価において、いずれにおいても老年看護学実習の目的・目標を達成するために効果的な活用ができることが示唆された。また、ルーブリック評価表の修正点など課題が明らかになった。1年間の試行から評価表の教育効果が明確になり、今後の教育的課題への示唆を得た。

1 老年看護学実習の形態とルーブリック評価指標の活用方法

指定規則別表3の老年看護学の実習は4単位を指定されている。そのうち2単位を老年看護学実習として認知症対応型グループホームに2週間、生活支援看護学実習として、在宅高齢者対象のサテライト・デイを2週間実施している。老年看護学実習の目的は、「老年看護の対象者としての高齢者を、総合的・多角的な視点で理解する。高齢者個人の人権を尊重し、高齢者及びその家族を含めた人々への心からの関心を寄せ、生活の質を高め、生きる力を支える看護が展開できる能力と態度を養う」とした。

実習目標は、表1のように9つの目標を設定している。

表1 老年看護学の実習目標

- ①高齢者を身体的、精神的、社会的にその人として理解する。(person)
- ②高齢者の健康と生活に関わる問題について、総合的に理解する。(problem)
- ③高齢者の生活の場を理解する。(place)
- ④高齢者の健康問題と生活機能に視点を置いた専門職の援助過程を理解する。(process)
- ⑤高齢者のQOLとそのゴールを理解する。(purpose)
- ⑥高齢者をライフコースの延長線上の生活者として理解する。(perspective)
- ⑦高齢者の諸問題に関わる他の専門職を知り、看護の役割と機能を理解する。(professionalism)
- ⑧高齢者とその人を取り巻く歴史的、伝統的、文化的な環境を理解する。(person-in-environment)
- ⑨学習の成果と今後の課題を明確にする。(progress)

*連絡先：古城幸子 新見公立大学看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

表2 実習計画

期間	実習方法								
学生名	A	B	C	D	E	F	G	H	
1週	月	学内	実習	実習	実習	学内	実習	実習	実習
	火	実習	学内	実習	実習	学内	実習	実習	実習
	水	実習	実習	学内	実習	実習	実習	学内	実習
	木	実習	実習	実習	学内	実習	実習	実習	学内
		学内ミーティング							
2週	月	学内	実習	実習	実習	学内	実習	実習	実習
	火	実習	学内	実習	実習	実習	学内	実習	実習
	水	実習	実習	学内	実習	実習	実習	学内	実習
	木	実習	実習	実習	学内	実習	実習	実習	学内
		学内ミーティング							

それぞれの実習目標に対して3～5の下位目標を設定し、その内容をルーブリックのレベルとして示したものが、ルーブリック評価表である(資料1参照)。

活用方法は表2の実習計画において、ルーブリックの使用は以下の3段階で行っている。

①学内演習において

2～4名の学生と教員1名による週1回、計2回の演習において、学生個々の実習体験をナラティブに語り、聴く。語られた体験が、ルーブリックのどの目標のどのレベルかを検討する。学びのレベルを深めるために、必要な視点を明らかにする。

②1週目学内カンファレンスにおいて

表3のように、1週目の、カンファレンスをナラティブ・ミーティング(Narrative meeting)とした。学生8～16名、教員3名の構成で、1週間の実習体験の中で学びとして印象深かった2つの学びを語り、聴く。学びの共通点や相違点を共有しあう中で、課題を明確にでき、解決策のヒントが見えてくる。

③2週目学内最終カンファレンスにおいて

最終カンファレンスはルーブリック・ミーティング(Rubric meeting)とし、学びをルーブリック評価表に落とし込んだものを発表し、ルーブリックの目標やレベルが達成できたかを確認する。

表3 学びの内容と学内カンファレンス

	協調するP(ねらい)	学びの内容	学内ミーティング
1週	Person	施設利用者としての高齢者	Narrative meeting ・印象に残った場面と得た学びを語り、共有する。
	Place	高齢者の生活の場の理解	
	Professionalism	施設の機能と専門職の役割	
2週	Process	高齢者へのかかわりとケアの実際	Rubric meeting ・各自の学びを実習総括ルーブリックに沿って振り返る
	Person	高齢者を個人として理解(バイオグラフィ)	
	Perspective	高齢者の人生への関心	
	Purpose	高齢者の生活と将来のQOLの視点(レクリハ)	
	Problem	生活障害と克服の課題	
	Professionalism	専門職の役割分担と協働	
	Process	高齢者へのかかわりとケアの実際	
P-in-environment	生活環境と地域が高齢者に与える影響		
Progress	高齢者観、老年看護観の内省		

II 研究方法

1. 研究対象

2012年度後期(3年次)から2013年度前期(4年次)に老年看護学実習を行ったA大学看護学部学生63名である。

総括記録である評価表に記述されたレベルの深度と記述を質的データとした。

2. 分析方法

研究者2名で評価表の実習目標と学習深度のレベルを得点化し、記述内容の記録から評価表の実習目標達成への役立ちと学生各自の課題の明確化に関する学習効果を抽出した。

3. 倫理的配慮

調査対象学生には研究の目的、匿名性の保持、データ管理の厳密性について説明し、記録の分析に同意を得た。

III 結果

学生63名のルーブリック評価表を単純に学生の記載したレベル(以下L1～L3とする)で集計をしたものが表4である。

1. 全体の傾向

学習深度の評価はL3の3点を到達点とした。63名の9項目全体の平均は2.35で、最高値の学生は2.8、最低値の学生は1.4であった。目標別にみると平均を大きく上回ったのが目標1と目標2であった。目標1は「高齢者を身体的、精神的、社会的にその人として理解する」で、2.71であり、L3と評価した学生は74.6%を占めた。目標2は「高齢者の健康と生活に関わる問題について、総合的に理解する」で、2.57であり、L3と評価した学生は61.9%であった。

平均を大きく下回ったのが目標4と目標7であった。最も低値は1.97の目標7であった。高齢者の諸問題に関わる社会資源の活用や地域サポートシステムの理解が不十分であった。次に2.11の目標4である。高齢者の健康問題と生活機能に視点を置いた専門職の援助過程の理解という目標のL3は、医療依存度の高い高齢者への看護についての理解が不十分であった。

表4 各目標の深度(%)

レベル	目標1	目標2	目標3	目標4	目標5	目標6	目標7	目標8	目標9
1	3.2	4.8	7.9	4.8	9.5	11.3	20.6	30.6	6.3
2	22.2	33.3	41.3	70.4	28.6	42.0	61.9	16.1	60.3
3	74.6	61.9	50.8	15.9	61.9	46.0	17.5	52.4	33.3
平均	2.71	2.57	2.43	2.11	2.52	2.35	1.97	2.23	2.27

レベルは、学習内容を示した具体的な目標を示す。平均値はレベル1を1点、2を2点、3を3点として計算したものである。
 レベル1・・・高齢者の状況の理解
 レベル2・・・高齢者の状況の意味を理解
 レベル3・・・高齢者支援の方法の理解

2. 実習目標の学びの深度

それぞれの到達レベルを実習目標に添って説明する。

1) 高齢者を身体的、精神的、社会的にその人として理解する。

L1「身体的、精神的、社会的側面での老いに伴う喪失が理解できる」は2名(3.2%)、L2「個々の高齢者の価値観を知り、個別性と多様性が理解できる」は14名(22.2%)。

L3「さまざまな経験に基づいた知恵や力をもつ存在であることが理解できる。人生の先輩としての高齢者を敬い、尊重できる」は47名(74.6%)であった。L3への到達は目標1がもっとも多く、対象の基本的な理解への学びは深まっていることが分かった。

2) 高齢者の健康と生活に関わる問題について、総合的に理解する。

L1「身体的、精神的、社会的な老いの過程が理解できる」は3名(4.8%)、L2「疾病やADLの低下による生活障害がアセスメントできる」は21名(33.3%)、L3「高齢者の抱える生活上の課題とその支援の方向性が理解できる」は39名(61.9%)であった。目標1について学びの深まりが見られ、身体的な老いによる生活障害や支援についての理解が深まっていた。

3) 高齢者の生活の場を理解する。

L1「グループホームなど高齢者関連施設の利用者の生活の場が理解できる」は5名(7.9%)、L2「生活の場における高齢者のなじみの関係が理解できる」は26名(41.3%)、L3「高齢者関連施設の果たす役割と機能が理解できる」は32名(50.8%)であった。L3が約半数であったことは、グループホームという施設での実習のため、他の高齢者関連施設の役割や機能を理解する機会がなかったことで、L2の生活の場の関係性にとどまったと思われる。

4) 高齢者の健康問題と生活機能に視点をのこした専門職の援助過程を理解する。

L1「生活障害によるADL低下のある高齢者の支援が実践できる」は3名(4.8%)、L2「認知症高齢者への関わり方とコミュニケーションの重要性が理解できる」は50名(70.4%)、L3「医療依存度の高い高齢者への看護について理解できる」は10名(15.9%)であった。L2の認知症高齢者への関わりは認知症対応型グループホームでの実習であるため、理解が深まることは当然と思われるが、L3の医療依存度の高い高齢者については、病院への受診介助の際に体験する程度で、頻度が多くないことが影響していると考えられる。

5) 高齢者のQOLとそのゴールを理解する。

L1「個々の高齢者のQOLについて理解できる」は6名(9.5%)、L2「個々の高齢者のQOLに影響を与える要因が理解できる」は18名(28.6%)、L3「個々の高齢者のQOLを高めるための支援と実践ができる」は39名(61.9%)であった。目標2と同様にL3が6割を超えており、学びが深まっている。QOLという言葉の捉え方に最初は戸惑いが見られた学生も、“安心”“安楽”“楽しみ”といった日々の生活の中で見出すことのできるQOLの理解によって、学びとして理解できるようになっている。

6) 高齢者をライフコースの延長線上の生活者として理解する。

L1「バイオグラフィーへの記述をとおして、過去から現

在、そして未来の高齢者の身体・非身体の像が理解できる」は7名(11.3%)、L2「バイオグラフィーの分析をとおして、価値観や人生観が個々の生活背景から形づくられていることが理解できる」は26名(42.0%)、L3「高齢者の人生と生活に深くかかわる家族の存在が理解できる」は29名(46.0%)であった。バイオグラフィーは、グループホーム利用者の中で気になる高齢者1人の情報を把握、考察する記録用紙である。個々の高齢者の人生のアウトラインをたどって理解することはできているが、家族の存在が施設であるため、見えにくいことが分かった。

7) 高齢者の諸問題に関わる他の専門職を知り、看護の役割と機能を理解する。

L1「健康から虚弱、疾病、回復のサイクルの中で、老年看護の専門性を発揮するさまざまな場とその重要性が理解できる」は13名(20.6%)、L2「保健・医療・福祉に関わる他の専門職との連携と協働が理解できる」は39名(61.9%)、L3「老年看護に関わる社会資源の活用や地域のサポートシステムが理解できる」は11名(17.5%)であった。目標7では、介護福祉士との協働という面で、他職種との連携は理解できるものの、L3の理解には実習体験では理解することが難しいことが分かった。

8) 高齢者とその人を取り巻く歴史的、伝統的、文化的な環境を理解する。

L1「生活歴や職歴、教育歴など高齢者の個人的な文化が理解できる」は19名(30.6%)、L2「方言や風習など、高齢者の生活する地域の文化が理解できる」は10名(16.1%)、L3「戦争などの社会の変動から、高齢者の人生に影響を与えた時代的な文化が理解できる」は33名(52.4%)であった。個人的な文化や環境は理解できているが、学びの深度としてはL1～3の表記にやや課題があり、得点化しにくいと思われた。

9) 学習の成果と今後の課題を明確にする。

L1「自己の老年期のイメージを明確にできる」は4名(6.3%)、L2「自己の老年看護観を深めることができる」は38名(60.3%)、L3「高齢社会の課題を理解し、看護の役割と機能について自己の考えを明確にできる」は21名(33.3%)であった。L2の看護観は深まった学生が多いが、L3の高齢社会の課題と看護の役割まで明確にすることはやや困難があったと思われる。

IV 考察

認知症対応型グループホームの実習では、9名の高齢者との日々の生活の流れに沿った実習形態であるため、ゆったりとした時間と空間の中で高齢者の肯定的理解をもたらし、高齢者観を深めている。そのため、高齢者の老化の過程や生活者の理解に関する目標1～3および目標5～8はL3の目標の達成度が高かった。しかし、達成度の

やや低い目標は目標4と目標7が挙げられ、その目標についてルーブリックの表現を修正(資料2)した。

1. 目標4について

医療依存度の高い高齢者への看護と社会資源やサポートシステムについては、学生によって理解度に幅があり、老年看護学の実習体験では目標が達成されにくいことが明らかになった。医療依存度の高い高齢者への看護は目標4のL3の項目であるが、認知症対応型グループホームという場の性質上、実習中には体験が困難である。一方、目標4はナラティブ・ミーティングで発表する印象深い学びの中でも、最も多く取り上げる目標である⁷⁾。

そこで、ナラティブ・ミーティングでの学生の語りをもとに、学生が実習体験を評価に反映しやすいように具体的な評価項目の追加を検討した。少人数の家庭的な雰囲気の中で、利用者のペースや体調に合わせて提供されるきめ細やかな対応から、個別性に合わせた援助の重要性をL2に追加した。また、高齢者のそばにいたり沈黙の時間のもつ意味、非言語的コミュニケーションや高齢者との距離感など、高齢者との援助の人間関係、高齢者の自尊感情を支える援助についての学びも多く、L3の項目として追加した。また、医療依存度の高い高齢者への看護については、医療施設で高齢者への看護過程を展開することが多い成人看護学実習の中で学びを深められるよう、看護学領域間で連携・継続した学習への指導が必要であることを再認識した。

2. 目標7について

社会資源やサポートシステムについては、高齢者の健康レベルと生活の場の移行の状況を踏まえて、高齢者への支援を広く長い視点でとらえることが必要である。在宅看護実習や地域看護学実習との関連が大きく、他領域実習の学びとの関連を認識できる指導も必要である。目標7に関連したナラティブ・ミーティングでの学びとして、倫理的な課題に関する内容が多く語られている。倫理的課題に対しては、倫理的ジレンマを感じ表出できることをL1に、個人的な感情だけでなく専門的な視点で倫理的な課題を理解できることをL2に追加し、学生の倫理的な感性を自己評価していけるよう修正を加えた。また、リスクマネジメントについては、レクリエーションの提供などの場面を通して学生が学習する機会が多いことから、リスクマネジメントの重要性の理解をL1に、リスクマネジメントへの対応をL2に追加し、実践内容を評価できるように修正した。従来、L2に挙げていた他職種との連携や協働の理解は、より高次な学習項目としてL3に変更した。

3. その他の改善点について

そのほか、目標5では、高齢者にとってのQOLが具体的にイメージしにくいいため、L1に日々の生活における高齢者の楽しみの理解を追加した。修正後のルーブリック

評価表は、2013年度後期の臨地実習から活用する予定である。

4. ルーブリックの活用効果

今回のルーブリック評価表の活用において、実習経過中のナラティブ・ミーティングを3回実施し、その度に評価表で目標を確認するプロセスを経た。実習のプロセスの中で繰り返し使用できることも実習効果を高め、レベルの深度を深めることにつながっている。実習最終総括としての評価表においても経過の学びの蓄積が良く見え、学生自身も実習体験が具体的に示されており、レベルの深まりを認識できたと思われる。ルーブリック評価表の活用は、筆者らの担当する他の実習評価においても、学生自身が自己評価でき、学びの達成度が視覚的に確認できる点で有用であることを報告⁸⁾した。今回の活用においても、学生、教員共に形成的評価が可能となり、経過を追って学びが深まることの効果を実感した。今後は、他領域実習の学びとの関連を認識できるようなミーティング時の指導が必要である。

本研究は、第33回日本看護科学学会学術集会において発表した内容に、加筆修正を加えたものである。

文献

- 1) 杉森みど里, 舟島なをみ: 看護教育学 第4版. 医学書院, 283-291, 2009.
- 2) 安藤輝次: 一般的ルーブリックの必要性. 教育実践総合センター研究紀要, 17, 1-10. 2008.
- 3) 新福洋子: アメリカ看護教育に学ぶルーブリック活用の注意点. 看護教育, 51, 1070-1071, 2010.
- 4) 佐藤嘉晃, 山方秀一, 岩崎弘志他: 歯科矯正学臨床基礎実習に対するルーブリックの導入試行. 北海道歯誌, 32, 46-54, 2011.
- 5) 佐藤嘉晃, 山方秀一, 岩崎弘志他: 歯科矯正学臨床基礎実習におけるルーブリックと振り返りに関するアンケート調査. 北海道歯誌, 32, 55-61, 2011.
- 6) 糸賀暢子: 学生の看護実践力が向上する実習評価へーポートフォリオ評価とルーブリック導入に至る本校のあゆみからー. 看護教育, 51, 1041-1047, 2010.
- 7) 木下香織, 古城幸子, 馬本智恵: 認知症対応型グループホームでの老年看護学実習における学生の学びー短期大学教育での実習目標への機能的な分析からー. 新見公立大学紀要, 33, 11-19, 2012.
- 8) 古城幸子, 木下香織, 栗本一美他: 介護予防プログラム「サテライト・デイ」実習の学習評価ールーブリック評価指標の活用を目指してー. International Nursing Care Research, 12, 125-132, 2013.

資料1 老年看護学実習ルーブリック評価表（試行版）

実習目標の自己評価									
スケール	1. 高齢者を身体的、精神的、社会的にその人として理解する	2. 高齢者の健康と生活に関わる問題について、総合的に理解する	3. 高齢者の生活の場を理解する	4. 高齢者の健康問題と生活機能に視点を置いた専門職の援助過程を理解する	5. 高齢者のQOLとそのゴールを理解する	6. 高齢者をライフコースの延長線上の生活者として理解する	7. 高齢者の諸問題に関わる他の専門職を知り、看護の役割と機能を理解する	8. 高齢者とその人を取り巻く歴史的、伝統的、文化的な環境を理解する	9. 学習の成果と今後の課題を明確にする
レベル1	・身体的、精神的、社会的側面での老いに伴う喪失が理解できる	・身体的、精神的、社会的な老いの過程が理解できる	・グループホームなど高齢者関連施設の利用者の生活の場が理解できる	・生活障害によるADL低下のある高齢者の支援が実践できる	・個々の高齢者のQOLについて理解できる	・バイオグラフィーへの記述をとおして、過去から現在、そして未来の高齢者の身体・非身体像が理解できる	・健康から虚弱、疾病、回復のサイクルの中で、老年看護の専門性を発揮するさまざまな場とその重要性が理解できる	・生活歴や職歴、教育歴など高齢者の個人的な文化が理解できる	・自己の老年期のイメージを明確にできる
レベル2	・個々の高齢者の価値観を知り、個性と多様性が理解できる	・疾病やADLの低下による生活障害がアセスメントできる	・生活の場における高齢者のなじみの関係が理解できる	・認知症高齢者への関わり方とコミュニケーションの重要性が理解できる	・個々の高齢者のQOLに影響を与える要因が理解できる	・バイオグラフィーの分析をとおして、価値観や人生観が個々の生活背景から形づくられていることが理解できる	・保健・医療・福祉に関わる他の専門職との連携と協働が理解できる	・方言や風習など、高齢者の生活する地域の文化が理解できる	・自己の老年看護観を深めることができる
レベル3	・さまざまな経験に基づいた知恵や力をもつ存在であることが理解できる ・人生の先輩としての高齢者を敬い、尊重できる	・高齢者の抱える生活上の課題とその支援の方向性が理解できる	・高齢者関連施設の果たす役割と機能が理解できる	・医療依存度の高い高齢者への看護について理解できる	・個々の高齢者のQOLを高めるための支援と実践ができる	・高齢者の人生と生活に深くかかわる家族の存在が理解できる	・老年看護に関わる社会資源の活用や地域のサポートシステムが理解できる	・戦争などの社会の変動から、高齢者の人生に影響を与えた時代的な文化が理解できる	・高齢社会の課題を理解し、看護の役割と機能について自己の考えを明確にできる

資料2 老年看護学実習ルーブリック評価表修正版

実習目標の自己評価										
スケール	1. 高齢者を身体的、精神的、社会的にその人として理解する	2. 高齢者の健康と生活に関わる問題について、総合的に理解する	3. 高齢者の生活の場を理解する	4. 高齢者の健康問題と生活機能に視点をあいた専門職の援助過程を理解する	5. 高齢者のQOLとそのゴールを理解する	6. 高齢者をライフコースの延長線上の生活者として理解する	7. 高齢者の諸問題に関わる看護の役割と機能、および他職種との連携を理解する	8. 高齢者とその人を取り巻く歴史的、伝統的、文化的な環境を理解する	9. 学習の成果と今後の課題を明確にする	学習者としての省察と課題の明確化ができる
レベル1	・身体的、精神的、社会的側面での老いに伴う喪失が理解できる	・身体的、精神的、社会的な老いの過程が理解できる	・グループホームなど高齢者関連施設の利用者の生活の場が理解できる	・生活障害によるADL低下のある高齢者の支援が理解できる	・日々の生活における高齢者の楽しみが理解できる ・個々の高齢者のQOLについて理解できる	・過去から現在、そして未来の高齢者の身体・非身体の像が理解できる	・健康から虚弱、疾病、回復のサイクルの中で、老年看護の専門性が理解できる ・リスクマネジメントの重要性が理解できる ・倫理的ジレンマを表現できる	・生活歴や職歴、教育歴など高齢者の個人的な文化が理解できる	・自己の老年期のイメージを明確にできる	・積極的に実習に参加することができる ・この実習での学習成果を述べることができる
レベル2	・個々の高齢者の価値観を知り、個別性と多様性が理解できる ・高齢者にとっての家族の存在やその支援が理解できる	・疾病やADLの低下による生活障害がアセスメントできる	・生活の場における高齢者のなじみの関係が理解できる ・「社会的な場」としての生活の場が理解できる	・個別的な援助や対応の重要性が理解できる ・認知症高齢者への関わり方とコミュニケーションの重要性が理解できる	・個々の高齢者のQOLに影響を与える要因が理解できる	・価値観や人生観が個々の生活背景から形づくられていることが理解できる	・リスクマネジメントへの対応ができる ・倫理的な課題を専門的な視点で理解できる	・方言や風習など、高齢者の生活する地域の文化が理解できる	・自己の老年看護観を深めることができる	・エビデンスを備えた学習ができる ・積極的に発言し、グループダイナミクスに貢献できる ・この実習で明確になった学習上の課題を述べることができる
レベル3	・さまざまな経験に基づいた知恵や力をもつ存在であることが理解できる ・人生の先輩としての高齢者を敬い、尊重できる	・高齢者の抱える生活上の課題とその支援の方向性が理解できる	・高齢者の生活の場の移行が理解できる ・高齢者関連施設の果たす役割と機能が理解できる	・高齢者との援助的人間関係が理解できる ・自尊心を支える援助の重要性が理解できる ・医療依存度の高い高齢者への看護について理解できる	・個々の高齢者のQOLを高めるための支援と実践ができる	・高齢者の人生と生活に深くかかわる家族や地域社会の存在が理解できる	・保健・医療・福祉に関わる他の専門職との連携と協働が理解できる ・老年看護に関わる社会資源の活用や地域のサポートシステムが理解できる	・戦争などの社会の変動から、高齢者の人生に影響を与えた時代的な文化が理解できる	・高齢社会の課題を理解し、看護の役割と機能について自己の考えを明確にできる	・学習上の課題克服のための方法を見出すことができる

Introduction of the Rubric system into Evaluation of the Practice of Gerontological Nursing

Sachiko KOJO, Kaori KINOSHITA

Department of Nursing, Niimi College, 1263-2 Nishigata, Niimi, Okayama 718-8585, Japan

Summary

In order to assess the practice of gerontological nursing, we introduced Rubric for formative evaluation that was focused on the quality of learning. Despite of only one year's trial, it was suggested that the Rubric was proven to be a very effective way to achieve the aim of the practice of gerontological nursing. Also, it was clarified that there were some challenges and modifications such as the expressions of the aims in setting levels of the Rubric.

Keywords : practice of gerontological nursing , evaluation of the practice , Rubric